

# AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学研究フォーラム（2001）2巻1号:66-67.

活性化した旭川医科大学の学術国際交流

石川睦男, 笹嶋唯博

## 依頼稿 (報告)

## 活性化した旭川医科大学の国際交流

## 1. 南京中医薬大学との「学術交流に関する協定」の締結

石川 睦 男

2000年7月5日、本学と南京中医薬大学との間に国際交流協定が締結されました。この両校の交流書に本学の久保良彦学長と南京中医薬大学の項平学長の署名が南京中医薬大学で行われ、眼科学の吉田晃敏教授、麻酔・蘇生学の岩崎寛教授と筆者が同席しました。ここで改めて、中医薬大学の概略を紹介します。

南京中医薬大学(Nanjing University of Traditional Chinese Medicine)は、六朝の古都である中国の南京市の西部に位置します。本校は、伝統中医学(Traditional Chinese Medicine, TCM)を教育する中国でも最も古い大学の1つで、1959年3月に創立し、中国衛生部から認定を受け、全国の中醫師教師研修教育機関の中核を担っています。本校は中国衛生部のTCMのナショナルセンターであるのみならず、1975年にはWHOのTCMの国際協力センターとなり、国家衛生部より全国で一番早く認定された、海外及び香港、マカオ、台湾から学生を募集し養成する中医薬科大学の一つです。また、中国衛生部の臨床薬理基幹でもあり、国際針灸研修センターも併設しています。

大学の本部には教職員が1000名余りいて、大学には、基礎医学院、第一臨床医学院、第二臨床医学院、中薬医学院、国際教育学院、成人教育学院、医学管理学部、香港・マカオ・台湾教育センター、中医薬研究院などの教学と科学技術修得の部門があります。中医、中医養生康復、中医外科、中医骨傷、中医看護、中薬、中薬製剤、中薬薬理、針灸、推拿(中医マッサージ)、(中医薬)国際貿易、中薬健康食品、中西医結合(7年制)、中西医結合産婦人科、中医肛(門)(直)腸学、中医影像学、海洋薬物学、衛生事業管理などの学科があります。TCMに関する7つの学部教育と9つの卒前教育コースがあり、さらに、30名の博士による9つの博士課程と、80名のポストドクターのスーパーバイザーによる21のポストドクターコースがあります。現在2500名の学生が在籍し、122名の教

授、309名の助教授、730名の講師を有しています。大学は3ヶ所の附属病院、一つの附属製薬工場、13ヶ所の教学病院及び98ヶ所の臨床実習の基地を持っています。大学の図書館には40万冊の本があり、中国語版と外国語版の雑誌は2000種類あります。

大学は国際交流と学術交流を繰広げ、アメリカ、イギリス、イタリア、ノルウェー、ドイツ、シンガポール、日本、韓国、オーストラリアなどの国々の医薬学校と長期的に共同で人材を養成し、科学研究の友好提携をはかっています。今まですでに80の国々と地区に対し3000名以上の人材を養成しています。現在、長期と短期の海外留学生と香港・マカオ・台湾の学生は合わせて約400名が在籍しています。学生の管理は大学の国際教育学院が担当しています。

このように、中医学と西洋医学を融和しながらWHOの協力センターを有している大学と協定を結ぶことは、本学の教育、研究、診療において今後、新たな展開を導くものとして期待されます。

本学と南京中医薬大学の今後の関係ですが、南京中医薬大学の産婦人科の談勇氏が1990年10月15日から1992年3月30日まで本学の麻酔・蘇生学講座に国費留学生として来学し、1992年4月から1996年3月までの4年間は大学院に在籍し本学より医学博士の学位を授与されています。さらに麻酔・蘇生学講座で1996年4月から1997年の3月まで文部教官助手として勤務した後に帰国しています。また、玉青良氏が眼科の研究生として1995年から2年間、本眼科学講座で研修を行っています。さらに眼科学講座の吉田晃敏教授は、南京中医薬大学附属病院の「眼科センター」開設に協力して、1998年11月に客員教授の称号を受けています。筆者は1999年10月に南京中医薬大学附属病院で生殖医学の技術指導を行い、同病院の顧問として「生殖医療センター」の発展に向け協力しています。また、今回の南京中医薬大学の訪問の際、吉田教授の尽力により、

旭川医科大学遠隔医療センターとの間で遠隔医療の実際が行われ、南京の新聞に大々的に掲載されました。

今回の国際交流協定は、旭川医科大学における教育・研究・診療の国際交流の一環として、南京中医药大学と学術交流・協力協定を締結し、(1)教官及び研究者の交流のため相互に研究員を派遣、(2)学生の交流、(3)共同研究・学術講演の実施、(4)図書資料・学術情報及び刊行物の交換などを行うものです。

学生の諸君で、中国の漢方医学を含むTCMに興味があり勉強したいという希望があれば、アーリーエクスプोजャーの一斑として数週間から1カ月単位で留学研修することは可能です。TCMに興味を持つ他の国からの留学生と一緒にWHOの協力センターで机を並べるのも、良い経験になるのではないかと思います。  
(旭川医科大学 産婦人科学講座)

## 2. マーサー大学医学部との「学術交流に関する協定」の締結

笹 嶋 唯 博

米国アトランタの南150kmのところに人口約10万人のメイコン市があります。昨年4月この町にあるマーサー大学医学部との姉妹校提携が交わされました。マーサー大学は米国では小規模の新設大学であります。総合大学として文系・理工系学部を有する総合大学であります。マーサー大学との姉妹校提携に至った経緯はチュートリアル教育の導入に始まります。本学でチュートリアル教育を導入するための準備として寄生虫講座の伊藤 亮教授と私の2名でチュートリアルを全面的に取り入れている海外の大学を視察に出かけたことに始まります。当初はマクマスター大学やハーバード大学等もあげられましたが、結局2人でマーサー大学に出向いた訳であります。メイコン空港に到着してから帰るまでの3日間は、マーサー大学医学部附属病院に相当するジョージアセンター病院(Medical Center of Georgia, MCG)産婦人科教授の T. J. Lin 先生がご夫妻で我々をお世話して下さいました。夜9時に到着して夕食をごちそうになり、その席で姉妹校提携をしてはどうかという話が持ち上がりました。ご招待の食事の度に姉妹校提携に向けての話が具体的に進展してゆきました。帰ってからはチュートリアルもさることながら、姉妹校提携の話は学長及び副学長のご了解を得て実現に向けて動き出しました。T. J. Lin 教授との度重なる交信の末、最後の段階として久保学長がマーサー大学を訪問することが不可欠であるということになり、学長のお共で今度は麻酔科の岩崎教授

と私の3人で昨年2月にマーサー大学を再度訪問しました。昨年4月の旭川医大での提携段階ではマーサー大学から Skelton 医学部長、Bina教授及び T. J. Lin 教授の御3人が本学を訪れ、調印が取り交わされた訳であります。旭川医科大学はこれ以前に姉妹提携校が無く、文部省からも海外医科大学との姉妹校提携が無い極めて珍しい大学として高く評価されていたということですが、旭川教育大学ではハルピン大学、カルガリー大学、イリノイ州立大学など複数の姉妹提携校があり、カルガリー大学からは3~4人イリノイ州立大学からは毎年1か月間5~6名の学生が来旭しております。本来なら本学はいくつかの姉妹校提携があり早々に留学生の交換が行われていても不思議はないはずですが、実際には実現していません。それというのも、本学では事前に姉妹校提携に伴う予算は皆無だからです。今回でも海外からの来客が3日間滞在するうち2日間は大学で負担するといわれましたが、残りの1.5日には困りました。2日分の銃弾を持たされて戦場に送られても最後の1日は素手で戦うしかないとなれば腕を振るおうとする兵士などいるわけがありません。学長や副学長の裁量で使える何らかの予算措置をまじめに考えるべき時期にあると思われま

す。少なくとも資本主義社会の終末像として米国が存在する以上、一定のタイムラグはあるものの日本の医学教育や医療制度も、自ずと米国型に移行していくという見通しに大過ないものと思われま

指の医師過剰地域です。その地区において今、開業医を市内に量産している旭川医大に米国の教育や医療システムをすぐさま取り入れる意味はないでしょうが、マーサー大学は立地条件や規模が本学と似ており、またその創設の理念には今回独法化に向けて本学が掲げる理念と極めて共通するところがあります。本格的なプライマリーケアを実践する医師を養成し、ジョージア州の地域医療の真の充実を目指していることから、その教育方針やシステムはやがて取り入れてしかるべき時がくるように思われます。マーサー大学医学部の1~2年目は完全なチュートリアル教育が行われています。学生は1学年56人でチュートリアル1グループ各7名です。私が見学したグループの平均年齢は32才で米国医学生との共通した経済事情として年間2万2千ドルの授業料を各々が稼ぎ出して進学してきたという背景から、各々の学業に対する熱心さはすさまじく、また彼らは既に医者としての基本姿勢も種々の社会活動を通じて培われているのではないかと思います。このような状況ではまさに出席カードは無意味です。一方、チューターも、チュートリアル教育を充実させ成果を上げるべく熱意も努力も本格的であります。午前中2時間のチュートリアルでは各学生の発言のバランスを見ながら、解剖、薬理、生化学、生理そして臨床と、いったい何が専門のM. D.かと思いましたが、1、2年目の指導教官にM. D.はおらず、私が見学したチューターは薬理専攻のPh. D.でした。彼らは基礎から臨床まで広い知識を有し討論を正しく進展させる能力は大変なものです。これならばチュートリアル教育の方が優れているとうなずけるものでした。一方、本邦では各大学とも何も言わないことをチューターの方針の如く正当化していますが、本質とかけはなれた見せかけで本当に成果が上げられるのか疑問を払拭することはできません。本学で特に問題なのは“いそがしい”や“臨床を知らない”などまったく理由にならないexcuseでチューターを逃れようとする教官の姿勢であり、某大学学生の教官評価の中に“給料どろぼう”という選択肢があるそうですが、異議を唱えることはできないでしょう。

3、4年目は臨床実習に移行しているため学生に接することは出来ませんでした。クリニカルクラークシップがほぼ完全に実施されており、MCG以外に州内の色々な病院へ学生がベッドサイドローニングの形で派遣されています。MCGは救急患者が頻繁に出入り

し院内は患者であふれていました。しかし全科があるわけではなく診療内容の充実度は科により差があり、私の関係では循環器外科はありませんでしたが、これはマーサー大学医学部の教育方針がプライマリーケアを重視したものであるためです。

姉妹校提携が実現して次に推進しなければならないのは交換留学の開始でありましょう。マーサー大学との姉妹校提携は本学以外に三重大学が1998年、金沢医科大学が1999年に行い、既に学生交換も開始されています。金沢医科大学では2000年夏からマーサー大学学生が2週間滞在し、種々の基礎医学研究プロジェクトや施設、さらには市内の開業医の幾つかを見学し、最後に観光を楽しんで帰ったという話であります。本学を含め3大学の不完全チュートリアルと完全実施のマーサー大学学生を同等に扱うことは困難であります。旭川教育大学では、イリノイ州立大学の学生は特定の講義に参加させ、また文化を研究させる特別な潜在カリキュラムを用意しているようですが、交換留学生の潜在カリキュラムや評価を今後どのようにしていくかが本学の課題の一つであります。今一つの課題は交換留学生の資金援助であります。旭川教育大学では学生、教職員から徴収された基金が数千万円に達しており、それによる留学援助制度があります。前述の学長裁量経費と合わせ何らかの制度を発足させる必要があらうかと思えます。学生交換は2002年春を目指しています。それまでに何とか形をつけたいものです。

(旭川医科大学 外科学第一講座)